

## 総合生存学館（思修館）における水関連大学院教育 Educational Program of Water Science in Graduate School of Advanced Integrated Study in Human Survivability

山敷 庸亮<sup>1\*</sup>, 川井 秀一<sup>1</sup>

Yosuke Yamashiki<sup>1\*</sup>, Shuichi Kawai<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 京都大学総合生存学館

<sup>1</sup> Graduate School of Advanced Integrated Study in Human Survivability

京都大学では、地球社会の課題を総合的に分析し、解決に導くための方法論や思想、政策などを幅広く探究する学問として「総合生存学」を定義し、その学問の発展を通じて、次代を担うグローバルリーダー人材を育成する大学院「総合生存学館（思修館）」を平成25年より設置し、教育研究活動を行う。

総合生存学館（思修館）では、上述のような「総合生存学」を修め、広範な諸学を俯瞰できる能力を備え、自らの高い専門性を社会の課題解決のために展開できる幅広い知識とそれらを統合・融合する新たな能力を備えたグローバルリーダー人材の育成を目的とする。その特徴ある教育プログラムの中で、生命の源としての「水」と「水循環」の重要性を学習するため、いくつかのカリキュラムにより焦点を当てている。

特に我々が着目するのは、流域における生命育成のための物質循環と、その流域に生命にとって「危険な」物質が流れ込んだ場合のリスクの把握である。両者とも、森林・河川・海洋と連なる、陸域・海域の連携によってなされる、地球水システムの根幹を成す水文循環により行われている。大学院におけるカリキュラムでは、前者を「人・自然循環学」として、森里海の連携に関わる学習を通じて、水源涵養林の重要性、そして里からの栄養塩供給と、河川および河口沿岸域における水圏生態系に焦点を当てた生命育成のための物質循環に焦点を当てる。後者においては、「地球環境リスク」という観点から、全く同じシステムに「危険な」物質が循環した場合のリスクについて論ずる。高度成長期の公害病から、現在における放射性物質の循環などを例に、現代文明に潜むリスクを、水域の研究を通じて明らかにする。また、そもそもの地球形成のプロセスと「水循環」が地球生命体の形成に与えたプロセスを明らかにするため「水惑星地球」という教科も開講している。

これらの内容を学習するために、フィールド実習を主体とした野外トレーニングを行うが、大学院教育において大きな問題となるのは、調査にリスクが潜んでいることである。それらのリスクを「把握」し、かつ学び行くためにカリキュラムとしての制約と、実際に学ばねばならない「自然」の大きさやリスクについて広く経験共有の場を提案したい。

キーワード: 総合生存学, 水関連教育, 流域, 物質循環, 汚染物質

Keywords: Study on Human Survivability, Water related educational program, Watershed, Material circulation, Pollutants